

2024年度TCPT第2回年次大会 講演内容・ワークショップ内容

開催日時 2024年8月10日(土曜日)10時から17時15分(18時まで交流会予定)

会場 品川インターシティ(東京都港区 品川駅すぐそば)

主催:一般社団法人東京プレイセラピーセンター(TCPT)

第1部 講演とワークショップ

「プレーパーク:遊びと子どもと大人 × 地域での子育て支援」

講師: 嶋村仁志氏

(一般社団法人TOKYO PLAY代表 / 一般社団法人日本プレイワーク協会代表理事 /
International Play Association : IPA 日本支部運営委員)

10:00-12:00 講演

プレイセラピストはどのように地域と連携し、子どもと保護者の地域支援に貢献できるのか?この問題意識から今回の研修企画がスタートしました。子どもと保護者を支援する時に、地域との連携や、地域に自らが外向いていって予防的な支援をすることは欠かせません。例えば、災害が起きた時、平時からの地域での専門家を含めたネットワーク構築が非常に重要です。あるいは相談につながるのではない子どもや家族を地域で支えるところにプレイセラピストがいることが、さらに予防的な地域貢献に関わることになるでしょう。この入り口として、子どもと保護者が安心安全に遊ぶ場を全国各地で展開している「プレーパーク」についてプレイセラピストが理解を深め、そこに関わるきっかけを作っていきたいと考えました。遊びとは何か、子どもとは何か、支援とは何か、を広く深く考える機会にもなります。プレーパークの理念など基本的な背景のお話とともに、そこで子どもの遊びをどのように展開する工夫をしているのか、また、大人たちの存在や大人と子どもの関係性を重視しているプレーパークの遊び支援のあり方についても、お話していただきます。心理専門家の会員だけでなく、広く一般にも開かれた講演会とする予定です。

12:00-13:00 ワークショップ

講演を基に、遊びと子ども、そして大人の関わりについて考える、プレーパーク関係者とプレイセラピスト(会員)との合同ワークショップを予定しています。それぞれの立場から遊びとは、子どもが育つとは、大人がどう関わるのが支援となるのか、ということと一緒に体験し、考えるワークショップにし、それぞれの仕事の理解を深め、連携の糸口を探っていきたいと考えています。

第1部 講師：嶋村仁志氏

上智大学卒業後、英国リーズ・メトロポリタン大学社会健康学部プレイワーク学科高等教育課程修了。
1996年に羽根木プレーパークの常駐プレーリーダー職に就いて以降、プレイワーカーとして川崎市子ども夢パーク、プレーパークむさしのなど各地の冒険遊び場のスタッフを歴任。その後フリーランスとなり、国内外の冒険遊び場づくりをサポートしながら、研修や講演会をおこなう。2010年「すべての子どもが豊かに遊べる東京」をコンセプトにTOKYO PLAYを設立。2005年から2011年までIPA(子どもの遊ぶ権利のための国際協会)東アジア・太平洋地域副代表を務め、現在は一般社団法人TOKYO PLAY代表理事、[一般社団法人日本プレイワーク協会](#)代表理事、大妻女子大学非常勤講師。

嶋村氏インタビュー記事「ほいくる：<https://hoiclue.jp/800011422.html>」

* CEU:『プレイセラピーに関するその他の領域 3CEU』

第2部 正会員によるプレゼンテーション

14:00-15:30 ワークショップ

「子どもと養育者の関係性を紡ぐプレイの力～児童養護施設での取り組みを通して～」

橋本佐枝子CPT™（品川景德学園）

このプレゼンテーションでは、プレイセラピストが子どもと一対一で個別のプレイセラピーをするのではなく、養育者と子どもによるプレイセラピーを支える役割になった場合に何ができるのか、何が難しいのかを考えることを目的とします。実践例として、児童養護施設において職員と子どもが個別に遊ぶ時間を持った取り組みをもとに、皆さんと共に学ぶ機会を持ちます。

児童養護施設は虐待など様々な事情で家庭では暮らせない子どもたちが生活する場所であり、ケアワーカー、心理職、看護師といった多くの職員が働き、家庭、児童相談所、学校、病院等と連携しながら子どもの育ちを支えています。児童養護施設にいる子どもに心理的支援を行う際にはトラウマ症状や何らかの問題を取り除く、といった従来の治療的アプローチだけでは十分ではなく、毎日の生活の中にかに治療的で成長促進的な関わりを織り込んでいくかをすべての職員と共に考え、実行していくことが最も重要となります。

今回お話しする取り組みは、親が子どもとプレイセラピーを実施する、親子関係への治療的介入であるフィリアルプレイセラピーを参考に、3歳から12歳の子どもたちと施設職員がプレイセラピーの形式で定期的なプレイの時間を継続して行ったものです。プレイセラピストは場所、おもちゃなど構造を設定し、子どもと職員が遊んでいる時は観察者、記録者、時にはもう1人のセラピストとして2人の遊びと関係性の構築を支えます。この取り組みの中で子どもと職員はたくさんの気持ちを共有し、関係性を築いていくプロセスが多く見られました。当日は個人が特定されない形でプレイの経過もお伝えします。

今回取り上げる具体的な内容としては以下のものがあります。

- ① 児童養護施設の子どもと大人について
- ② 子どもと養育者のプレイセラピー
- ③ 児童養護施設での取り組み実践

上記について、ロールプレイやディスカッションを通して、個別プレイセラピーではない形でプレイセラピストができること、プレイの力、そして子どもやその周りにいる大人たちの持っている力を再確認し、皆さんの臨床において個別プレイセラピー以外のプレイの活用の可能性を感じられるような時間にしたいと思います。

- ・取り上げるプレイセラピーのトピック: 児童養護施設における養育者と子どものフィリアルセラピーの実践
- ・参加者に求められる習熟度: 初心者から習熟者までどなたでも参加可能
- ・プレゼンテーションが基づく理論アプローチ: 子ども中心プレイセラピー (CCPT), フィリアルプレイセラピー、セラプレイ
- ・CEU: 『プレイセラピーに関するその他の領域 1.5CEU』

15:45-17:15 ワークショップ

「Prism of Isms: プレイセラピーにおける文化を考える」

小川裕美子 CPT-S™ (Marist College: マリストカレッジ、米国)

湯野貴子 CPT-S™ (ファミリーメンタルクリニックまつたに)

臨床をする中で自分とは異なる文化背景を持つクライアントに出会った経験はありますか?と聞かれたらまず、人種、国籍の違いなどが思い浮かぶと思います。しかし文化を「ある集団に共通する行動パターン、またはそれらの背後にある価値観」と広く定義をすると国、人種のほかに、性・ジェンダー、宗教、障がい、階級、年齢、地域などの違いにも文化の違いがあることとなります。そうになると、プレイセラピーで出会う子ども、家族一人一人と、私達プレイセラピストは文化の違いを体験していることとなります。そして文化の違いは意識的、無意識的偏見を生みます。多文化間カウンセリングの第一人者Derald Wing Sue は、人間であれば誰でも異文化への偏見は持っている、と言い、その偏見を意識し、偏見の解消に取り組む作業を個人が行わない限り、偏見が臨床のあらゆるところに影響してくることを指摘しています。子どもやその家族がいる環境を深く理解し関わるのが求められるプレイセラピストとして、文化の違いについて意識をすることは必須であるにもかかわらず、そういったことを学ぶ機会はいまだに少なかったように思います。今回TCPT第2回年次大会では、この発表を通してプレイセラピーにおける文化について参加者の皆さんと一緒に考える機会を提供したいと思っています。

具体的には

1) 文化とは

2) 多文化コンピテンシーと多文化姿勢

3) プレイセラピーにおける文化の表現

についてレクチャーし、その後アクティビティを通して参加者が自分のいる文化そしてその文化にいるために自然ともつ特権 (privilege) への意識を高める場を提供したいと思っています。

・取り上げるプレイセラピーのトピック: プレイセラピーと多文化

・参加者に求められる習熟度: 初心者から習熟者までどなたでも

・プレゼンテーションが基づく理論アプローチ: 文化についての発表であり、どの理論にも適用できる内容である

・CEU: 『プレイセラピーと多文化 1.5CEU』

* 2024年TCPT第2回年次大会は臨床心理士資格認定ポイント申請予定です。